

令和4年度自己評価表

様式2

鳥取県立皆生養護学校

中長期目標 (学校ビジョン)	自己の生き方を探求していく人の育成 ～未来を生き抜く力を育むことを通して～	今年度の 重点目標	1. 幼児・児童・生徒一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進 2. 安心・安全、信頼される学校体制の構築 3. 分担と協働、意識改革による学校運営
-------------------	--	--------------	---

年 度 当 初					評 価 結 果 (2) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度の改善方策
一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育	幼小学部	「学ぶ・人と関わることが大好きな子」を育てるための授業づくり	○幼児児童が「学ぶ・人と関わる」ことが大好き」と感じられる授業を行っている。	○年間通して教職員間で子どもの姿を話題にしたり日々授業を検討したりできるよう、5月中に幼児児童の「学ぶ・人と関わる」姿を可視化(絵や言葉に)する。 ○上記の姿につながる適切な実態把握や授業づくりをするため、授業づくり推進日や学部研修日の機会に、グループで検討したり指導案を作成したりする。 ○月1回のペースで学部や学習グループ内で授業を持たない時間を設定し、早めに周知する。	○前期にイラストで描いた幼児児童の「学ぶ・人と関わる」ことが大好き」と感じている姿に向かうために、後期は指導案作成等の機会に確認しながら授業づくりを行うことができた。 ○学部の目標を意識した授業ができたかという問いに「良い」「どちらかと言えば良い」と回答した教職員が100%であった。	A	○来年度も学部内で計画的に授業づくりのための時間を設定する。 ○教職員からは年度初めに子どもの姿を具体的にイメージしたことが良かったという意見が多数あった。一方、保護者アンケートでは「進路指導」の観点で評価が低かった。今後は、数年後を見通しながら授業づくりをするために、学部研修をしたり懇談時に保護者と将来のイメージを共有したりしていきたい。
	中学部	意欲的に学習に取り組む力を育てる授業の充実	○生徒一人一人の目標を意識して、「何ができるようになるか」を明確にした単元構想や授業づくりを行っている。	○「個を語る会」などを用いて、生徒の実態を把握したり共通理解を図る。 ○学習や日常生活で生かせるように、「学習グループの会」や「学習グループの打合せ」で、生徒の目標を日頃から明確にしておく機会を設定する。 ○学部裁量日に、ICT活用や授業実践、教材紹介などができるような研修を設定する。	○「何ができるようになるか」を視点に話し合いができるように、学習グループの会では個別の指導計画ファイルを持ち寄り、学習計画の見直しや年計の記録に取り組んだ。個別の指導計画ファイルの活用により、生徒一人一人の目標を意識して授業づくりを行うことができた。100%の教職員から肯定的な評価を得られた。 ○学部裁量日では、生徒一人一人の年計について、授業で関りの多い教員を2～3人のグループに編成し、複数で記録、修正を行った。これにより、さらに「何ができるようになるか」を明確にした単元構想を検討することができた。	A	○生徒一人一人の目標を意識して、単元構想や授業づくりを行うための話し合いが定着してきている。今後は、各担当者が作成した年計や各教科・自立活動それぞれの個別の指導計画等をファイルを基に照らし合わせ、生徒の実態に応じたよりよい計画に基づいて授業づくりができるように、学習グループの時間を今年度以上に確保し、検討していけるようにしたい。
	高等部	生徒一人一人が「(将来のために)やってみてみたい」「できた」を感じる学びの保障	○生徒が「やってみてみたい」「できた」と感じられる授業づくりを行っている。	○学習グループの会の時間を増やし、授業づくりのための情報共有ができる時間の確保に努める。 ○生徒との対話に努め、生徒自身が学習に主体的に取り組めるようにする。 ○授業づくり推進部と連携し、円滑な授業研究の実施に努め、教職員一人一人が主体的に自らの授業力向上に取り組めるようにする。 ○授業づくりに生かせるよう、授業後の生徒アンケートを実施し、生徒の期待感や達成感を数値化する。	○週一回の学習グループの会での情報共有や、授業づくり推進日のグループ協議を通し、全教職員が「生徒が『やってみてみたい』『できた』と感じられる授業づくりを行った」と回答した。 ○授業づくり推進部の取組を通し、66%の教職員が自分の授業力が向上したと自己評価した。グループ協議を学部内でも行うとよいと複数の教職員が回答した。 ○授業後のアンケートでは、目標達成度について、実施した授業の95%以上の生徒から肯定的評価を得た。毎時間アンケートを実施すること、結果をタイムリーに授業者に返すことが課題。	A	○週一回の学習グループの会について、有効だったという回答が多く、次年度以降も継続するとともに、同じ授業を担当する教職員間で定期的に授業について語る時間を設定する。 ○より授業づくりに活かせる有効な授業アンケートの実施方法を検討し、次年度も生徒の自己評価を授業づくりに活かす。
	教務課	実態把握表の項目についての整理、検討、周知	○実態把握表の項目が整理され、指導に活用している。 →【目標変更】 生徒の実態や配慮事項等を記載する書類が整理され、指導に活用している。	○指導に必要な実態把握の項目を精査するため、授業づくり推進部や自立活動部と連携して整理・検討をすすめる。 ○整理・検討した項目を活用しやすくするため、情報課や自立活動部と連携してデータベース等での運用を図る。	○活用されにくい実態把握表に替えて、実態や配慮事項を記載する指導計画等の書類について、作成時期や参照時期、保管場所等の整理を図るとともに、活用について各学部の学習指導要領改訂のペースに応じて提案した。教職員アンケートでは「幼児児童生徒の実態や配慮事項に基づいた指導計画等の作成」、「教務課による指導計画等の作成についての情報提供や説明、機会の設定」について、いずれも「良い」「どちらかと言えば良い」の回答が90%を超えた。一方、少数ではあるが「どちらかと言えば悪い」の回答もあったことから、改善の必要性もあると考える。	B	○改善のポイントとして、提案のタイミングや共有方法の工夫が考えられる。各資料を活用するタイミングでの提案を図っていたが、一つの資料が他の資料作成で参照されることを見越して、より早いタイミングでの提案が望ましいと考えられる。そのためにも、いつでも誰でも確認できる共有方法が有効と考える。今年度は校内サイトの電子掲示板等で共有資料を提示したが、このことについて十分に浸透していなかったため、活用できるよう働きかけていきたい。

活動の推進	様式2	授業づくりに取り組み、推進部向上	○日々の忙しさに追われたり、自分の授業に自信が持てなかったりする教師が多数いる。 ○教職員自らが誰かに促されるのではなく、自分の授業力に向き合って研鑽等することで、結果幼児児童生徒にとっても楽しくて有意義な授業づくりができるような、仕組みづくりが必要である。	○教職員一人一人が自分の中にある「楽しい授業」「有意義な授業」を目指し、授業づくりや改善をグループ討議や授業公開等を通じて深めることで、子どもたちにとっても楽しくて有意義な授業を行っている。	○メタ認知を測るための自己評価アンケートを年3回行い、自らの授業力について考える機会を持つ。 ○学部縦割りのグループを作り、自分の授業について語る・人の授業について聞くことを繰り返し体験する中で、授業づくりを深める仕組みを提案する。 ○年1回以上の授業公開、事後ミーティングの機会を作り、有効な意見交換の場を設定する。 ○外部講師に継続的な指導を依頼する。	○月に1度の授業づくり推進日には、活発な話し合いができるようアイスブレイクを行ったり、各グループの話し合いの様子を紹介したりした。グループによっては、普段話さない他学部の教職員とも授業について話を深め、得るものがあったという意見が聞かれた。 ○授業公開は95%が公開し、事後ミーティングを行った。授業づくりをする上で困っていることや知りたいことを絞って話し合いを深めることができた会もあった。 ○一年間の取り組みの中で、授業力（授業への意欲や児童生徒の変容、教材研究等）が向上したと答えた教職員が70%を超えた。また評価展望アンケートでは、楽しく有意義な授業を行うことができたかという質問に、86%の教職員が十分できた・ある程度できたと回答があった。	A	○今年度の取り組みを行う中で、教職員一人一人が自分の授業について振り返った。「授業力をつけたい」「授業について語りたい」という思いがさらに高まるよう、授業についていろいろな角度から研修する機会や今年度同様、公開する機会を設け授業力の推進を図る。
	進路指導課	教職員のキャリア教育についての見識の深化と幼児児童生徒の生き方や可能性を模索するための実践の蓄積	○キャリア教育に関する基本的な知識は定着しつつあるが、キャリア教育の取り組みが十分にできた実感を持つことができていない教職員もいる。キャリア教育の視点を持ち、子どもたちの生き方の模索や可能性の拡大に向けて、各学部の段階に合わせたキャリア教育についての理解や実践事例の蓄積が必要である。	○各学部のキャリア教育のテーマを意識し、幼児児童生徒の生き方や可能性を模索するための実践を心がけている。	○各学部の実践事例に基づいたキャリア教育に関する自主研修会の企画・運営、キャリア教育と普段の学習との関連づけについて学部への周知をする。 ○各学部ごとのキャリア教育のテーマが分かるように、観点別系統表を作成し、教職員と共通理解を図る。	○研修等を設定し、各学部の取り組み、卒業生の事例、キャリア教育に関する共通理解を図った。 ○教職員アンケートでは、幼児児童生徒の生き方や可能性を模索するための実践ができた肯定的に評価をする教職員が79%、できなかったと評価する教職員が21%いた。 ○学部ごとのキャリア教育のテーマの共通理解を図ったが、学部によってはキャリア教育のテーマに係る重点項目の洗い出しは不十分である。	B	○キャリア教育における実践事例や卒業後の生活に関する事例等、様々な事例や関係機関から得た情報等を共有する機会を設定する。 ○夏季休業中に研修会を計画し、幼児児童生徒の生き方やつけたい力について検討する。特に小学部においては、キャリア教育のテーマに係る重点項目の洗い出しとキャリア教育に視点を当てた授業実践の推進について重視する。
	人権教育・生徒指導部	○人権感覚を養い、個人の価値を尊重し、他者と協働する態度の育成 ○生徒指導に係る校内の状況の把握と予防対策の推進	○人権教育に関する教職員研修のテーマが近年偏りがちになっている。教職員の人権感覚を磨いていくためにも視野を広げる必要がある。 ○教職員は日頃から幼児児童生徒の丁寧な観察を行っているが、引き続き積極的に問題行動の未然防止、早期発見、早期対応や指導の流れを徹底し、指導を行っていく必要がある。	○教職員の近年実施していないテーマでの人権教育研修会を実施し、人権を守る視点の理解を深めている。 ○学部や学習グループの中で幼児・児童・生徒のその日の様子が伝わっており教職員間で連携して的確な指導がなされている。	○教職員研修のテーマの見直しをする。 ○人権教育の年間指導計画の前期評価をもとに、後期の指導内容を充実させる。	○本校の「いじめ防止基本方針」、「児童虐待の対応」や問題行動に対しての「指導の流れ」に関する教職員研修の場を設け周知を図る。 ○学校生活アンケートや日頃からの丁寧な観察、話しやすい関係づくりを心がけ幼児・児童・生徒理解や生徒指導に係る校内の状況を把握し、学部や学習グループで共有し、指導につなげる。	○近年実施していない同和問題をテーマに夏季休業中に教職員研修を行った。今年度の研修が自身の人権感覚を磨いたり、人権を守る視点を深めたりすることにつなげることができたかという質問に対し、89%の教職員ができた・ある程度できたと答えた。合わせて今年度の研修内容がよかったという意見が多数あった。一方、「教職員の人権感覚に差がある」「教職員の人権感覚をさらに磨く必要がある」「これからもテーマが偏らないよう研修を組んでほしい」「社会が変化する中で、新たな差別が生じており、学び続ける必要がある」等の意見もある。 ○年度初めに指導の重点項目を絞り、前期評価を行った。それをもとに、後期の指導内容についてそれぞれの実態に応じて再検討を行い、人権教育参観日を含め指導の充実に努めた。「育てたい資質・能力を明確にした人権学習の実施」について、84%の教職員ができた・ある程度できたと答えた。 ○年度初めに生徒指導に関する教職員の研修の場を設け、問題行動に対しての「指導の流れ」や指導の徹底を図った。そして日頃から学習グループで幼児・児童・生徒の様子や生徒指導に係る情報を共有し指導に生かしていくように努めた。 ○幼児児童生徒の日々の様子が共通理解され、問題行動の未然防止、早期発見、早期対応等、教職員間で連携して的確な指導ができたかという質問に対して82%の教職員ができた・ある程度できたと答えた。一方、「問題行動に関する事例研修が必要である」、「問題意識の目や、声に出して確認しあうことが日常的に行えると良い。」等の意見もある。	A

安心・安全、信頼

社会参画活動等をと おした共生社会実 現へ向けた取組の推 進	様式 2	○地域の公民館等の学校外部と交流を設定したいがコロナ禍で直接交流するのが困難な状況にある。	○各行事や交流後に、保護者または交流相手から「交流を通して障がいに対する理解が深まった」「教育活動でどんな力をつけたいか等が伝わった」と肯定的回答や感想が多く寄せられている。	○行事等では、人数や場所、換気や健康チェック等の感染防止対策を徹底し、安全に実施できるようにする。 ○外部との交流においては「障がい理解」「共生社会」を意識した交流内容や打合せ(動画の活用等)をする。コロナ禍における適切な交流手段(オンライン等)を活用する。 ○目標の達成度が客観的に把握できるようなアンケート項目を作成する。	○行事(スポレク・ブライト)後の保護者アンケート「教育活動でどんな力をつけたいか等が伝わったか」に関する回答では「そう思う」が83%だった。感想も「チャレンジする場面の設定」「個々に合った工夫」等、肯定的なものが多かった。 ○地域交流の感想については、交流先の各公民館の方へとったアンケート回答でも「そう思う」が96%だった。「オンラインで声や表情が伝わりにくい」という感想もいただいたが「子どもたちの笑顔がよかった」「集中している姿がうれしかった」「先生たちの力がすごい」「次回は直に会って活動したい」等の肯定的意見が多く寄せられた。	A	○感染症の拡大状況に応じてではあるが、オンラインだけでなく、対面での地域交流を模索する。 ○交流相手に本校の教育活動や障がい理解を軸に啓発していくことは引き続き行われるべきものであるが、同時に「なぜ交流するか」「何を発信することに意義があるか」を教職員集団に説明し、意識を高めて臨むようにする。
	総務部	業務の効率化と平準化の促進	○教職員が学校全体の業務削減に主体的に取り組み、自分にできることを一つ以上行っている。	○毎月の時間外業務の記録と、衛生委員会等から情報収集し、教職員間での業務の偏りや、個人内で月による業務の偏りがないか把握する。 ○学部内業務や、分掌業務等、例年どおりの業務の見直し、平準化への取り組みについて話し合う時間を設ける。 ○教員でなければならない仕事と、教員でなくてもよい仕事を洗い出し、ワークセンター等へ移行できる仕事は移行する。	○業務削減を意識して自分にできることに一つ以上取り組むことができたと答えた教職員が81%だった。時間外業務については、月30時間を超える者は、4月から6月まで月平均11人、7月以降は0人の月が多く月平均1人だった。自分にできることに取り組んだ結果であると思われる。 ○時間外業務の多い教職員の業務内容から業務の偏りを把握した。平準化のために、学部や個人に返して対応できたことと、分掌の業務内容の見直し等改善できなかったことがある。 ○今まで教職員がしていた消毒、掲示、文書配布、行事準備等、ワークセンターに移行し教員の業務削減につなげることができた。	B	○教職員の業務の役割や分担を明確化する。年度途中であっても、課題に対応し平準化への取り組みを進める。 ○教務課、情報教育課等他分掌と役割分担しながら業務削減に努め、幼児・児童・生徒理解や授業準備に時間をかけることができるようにする。 ○衛生委員会で話し合われる内容が、業務改善につながることで実感できるよう、委員と協同して取り組んでいく。
	その他	事務部 教育環境及び施設・設備の適切な管理	○施設・設備の老朽化による修繕の必要性または安心安全な教育環境の整備及び特色ある教育活動の支援のためにも中長期的な計画策定が必要である。 ○幼児・児童・生徒にとってよりよい環境づくり、生徒を中心にした教育環境の充実を図る。 ○本来あるべき姿に近づけられるよう、幼児・児童・生徒を中心に活かし、効果的な予算執行を行う。 ○学校全体の動き(方向性)を見ながら業務に取り組む。 ○安全・安心な教育環境であるよう心がける。	○予算状況について随時教職員へ情報提供し、計画的な予算執行に努める。 ○予算執行については、必要性を精査し、早期に事業効果が発揮されるよう計画的な執行に努める。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求をしていく。 ○新型コロナウイルス感染症対策予算は必要であり、別枠予算を含め学校運営費予算から効率的に執行していく。	○学校運営費予算執行状況について、現在精査中であり出来次第速やかに教職員へ情報提供をしていく。 ○指導充実事業予算により公式ボッチャシートを購入した。 ○理科教育設備整備費等補助金により、人体骨格模型他を購入した。 ○管理棟、教室棟に続き、令和5年度予算に特別教室棟の屋上防水改修及び外壁塗装、サーバー移設他を予算要求したところ。 ○急遽の施設修繕について、適宜臨時要望し、追加で予算配分され施工済み。(多目的室照明器具改修他) ○通学バスリース事業で新車両を令和5年4月1日納車で契約していたが、メーカーのエンジン認証不正問題により納車時期が遅れる見込み。	B	○複数人で予算状況を確認し、決算見込みをたて、随時教職員へ情報提供していき、計画的な予算執行に努める。 ○予算執行については、必要性を精査し、早期に事業効果が発揮されるよう計画的な執行に努める。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求をしていく。 ○引き続き新型コロナウイルス感染症対策予算は必要であり、学校運営費予算から効率的に執行していく。 ○通学バスリースについて、他メーカー車両で早期に納車ができるよう、引き続き契約先と調整を図っていく。

評価基準 A: 十分達成[100～80%] B: 概ね達成[80～60%程度] C: 変化の兆し[60～40%程度] D: まだ不十分[40～30%程度] E: 目標・方策の見直し[30%以下]